洛東遺芳館所蔵

古瀋瑠璃の研究と資料

山田和人 著

研究叢書

果遺芳館所蔵

古浄瑠璃の研究と資料

田和人 著

江苏工业学院图书馆
藏书章

和泉書院

■著者紹介

山田和人（やまだ　かずひと）

同志社大学文学部教授

業績　共編『竹本義太夫浄瑠璃正本集』（大学堂書店）一九九五年二月。編著『豊竹座浄瑠璃集㈢』（国書刊行会）一九九五年六月。「竹田からくり関連の絵画資料」『国語と国文学』一九九九年十一月。「竹田近江少掾清房の竹田芝居」『近松の三百年』（和泉書院）一九九九年六月。「からくりと古浄瑠璃―からくり「懐胎十月図」をめぐって―」『歌舞伎研究と批評』九号・一九九二年六月など。

研究叢書　247

洛東遺芳館所蔵
古浄瑠璃の研究と資料

二〇〇〇年二月二九日初版第一刷発行
（検印省略）

著　者　山田和人
発行者　廣橋研三
印刷所　亜細亜印刷
製本所　関製本
発行所　有限会社　和泉書院
〒五四三―〇〇〇二
大阪市天王寺区上汐五―三―八
電話　〇六―六七七一―一四六七
振替　〇〇九七〇―八―一五〇四三

ISBN4-7576-0032-1　C3393

はじめに

洛東遺芳館には、膨大にして保存状態の秀逸な資料が所蔵されている。
館長香川聖一氏作成のリーフレットから収蔵品の概略を引用して示す。

婚礼調度　約二五〇年前、京の豪商那波家より柏原家四代目当主孫左衛門に嫁入の時の持参の調度品、呂色平蒔絵、梨子地蒔絵の大名調度で町衆に現存する歴史的資料

諸道具　膳部、椀、湯桶など

絵画　土佐派、狩野派、円山派、四条派の掛軸、屏風、襖絵など

浮世絵　春章、清長、歌麿、北斎、広重、豊国など

墨跡　大徳寺、万福寺など高僧の書

和歌懐紙　公家、景樹、蘆庵、千蔭など

古書　江戸時代写本、木版など

刀剣　鎌倉、室町、桃山、江戸時代の刀、脇差、守刀など

衣裳　江戸後期の打掛、振袖、小袖

焼物　茶器、香炉、香合、絵皿、猪口など

古文書　家業経営上の家内定法帖、式目、条目、倹約令など

遊具　百人一首かるた、伊勢物語かるた、双六、人形など

京都の豪商「柏原」の家に代々伝えられ、保存されてきた、多岐にわたる収蔵品を収めている。昭和四十九年から「洛東遺芳館」として資料の公開に踏み切り、五十二年には邸内に新たに展示館を建設し、春秋年二回特別公開を行っている。

柏原家の代々については、香川聖一館長の「『里代の調度』を生んだ巨商那波屋と豪商柏原家の歴史」（『婚礼のいろとかたち』展図録・京都文化博物館・一九九七年四月）に詳しい。

本書には、洛東遺芳館所蔵資料のうち、近世の芸能及び演劇関連の板本資料の整理を行った成果を収める。なかでも、『源平軍論』『弘法大師出世之巻』『熊野権現開帳』の古浄瑠璃三種の研究と資料を中心にまとめた。

洛東遺芳館所蔵の古浄瑠璃は現在、如上の三作であるが、かつては六冊の古浄瑠璃が所蔵されていたようである。というのも、この三作は、揃いで発見されたのではなく、ばらばらに整理用の木箱から出てきた。その後、この三作を束ねていた仮の包み紙が見つかり、その包み紙の裏側には、これ以外に、『百丈山大知禅師伝暦』『七小町』『よりちか二度のぎやくしん』の三作の作品名が見出された。

包み紙の表には、「往古浄留璃本　三冊　源平軍論　明暦四年板　弘法大師出世ノ巻　延宝七年板　熊野権現開帳平太郎きすい物語　延宝八年板　〆三冊」とある。裏側には、「往古浄留璃本　五冊（四とさらに上書き）　源平軍論　明暦板一冊　百丈山大知禅師伝暦　一云わうばく山　延宝七己未年板　七小町　同五年板　弘法大師出世之巻　延宝七己未年板　よりちか二とのきやくしん　万治四年板　熊野権現開帳平太郎きすい物語　延宝八庚申年板」とある。当初は六冊の古浄瑠璃が所蔵されていたことが確認できる。その後、『百丈山大知禅師伝暦』『よりちか二とのきやくしん』が失われ、最後に『七小町』がなくなったようである。というのも、『百丈山大知禅師伝暦』と『よりちか二とのきやくしん』の右には傍線が墨書されており、二冊が相次いで失われたことを示している。総冊数の表記が、六から五、さらに、四と上書きされていることでわかる。三冊になった時点で、包み紙を裏返して

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

現状の三冊の書名を記したのであろう。残念ながら、これらの失われた三作は現在所在不明である。かなり早い時期に失われたものであろう。

なお、『弘法大師出世之巻』の表紙次の合紙には、「木原宮六拾壹番」という整理番号があり、『熊野権現開帳』にも「木原宮六拾四番」とあって、両本の出所が同じであることが確認される。

幸いなことに残存しえた古浄瑠璃三本は貴重な資料であり、当館にのみ所蔵されている稀覯本であった。

そこで、古浄瑠璃三種『源平軍論』『弘法大師出世之巻』『熊野権現開帳』についての調査、研究の成果を中心に、研究編と翻刻編・影印編としてまとめた。

研究編には、それぞれの古浄瑠璃についての論文を収めた。

『源平軍論』は、すでに紹介されている江戸板とは異なる上方板の正本であり、その存在は全く知られていなかった。いささか複雑な出版事情を抱えている本ではあるが、これによって、当時の浄瑠璃史及び浄瑠璃正本の出版事情などを明らかにするうえで、貴重な資料である。また、『弘法大師出世之巻』は、当館にのみ所蔵される稀覯本であり、井上播磨掾の高弟である井上市郎太夫の現存する唯一の正本である。井上播磨掾の没年の推定にも資するところ大である。弘法大師物の浄瑠璃研究には、欠かすことのできない資料のひとつである。また、『熊野権現開帳』は、従来より知られていた東大本の欠落を補うことのできる貴重な一本である。

また、参考編として、調査の過程で発見された、未公開の新出資料、勝川春章の役者絵本『三芝居役者絵本』の解題と影印を追加した。最後に、「近世芸能・演劇関連資料目録」を付した。

目次

はじめに……(一)

研究編

一　『源平軍論』について――東西浄瑠璃の結節点――……三

二　『弘法大師出世之巻』について――大師物浄瑠璃の展開に即して――……二九

三　『熊野権現開帳』について――洛東遺芳館本の位置――……五七

翻刻編

一　『源平軍論』……七五

二　『弘法大師出世之巻』……一〇七

三　『熊野権現開帳』……一三七

影印編

一　『源平軍論』……一六九
二　『弘法大師出世之巻』……二〇九
三　『熊野権現開帳』……二四五

参考編

一　三芝居役者絵本――解題と影印――……二八五
二　近世芸能・演劇関連資料目録……三〇七
　I　板本目録①……三〇七
　　板本目録②……三二五
　II　番付目録……三三九

初出一覧……三六五
あとがき……三六七

研究編

一　『源平軍論』について

――東西浄瑠璃の結節点――

はじめに

従来、『源平軍論』の正本としては、国会図書館に所蔵されている江戸板の正本[注1]が知られているだけであり、『国書総目録』にもその一本だけが掲出されてきた。ところが、それとは異なる上方板の正本が洛東遺芳館（京都市東山区問屋町通五条下ル三丁目西橘町四七二）から発見された。この正本は、従来よりその発見が待望されていた上方板の正本であり、『源平軍論』の研究ひいては万治頃の古浄瑠璃研究に資するところの大きい資料と思われる。そこで小稿では、洛東遺芳館本について、以下の要領で検討を加えつつ、『源平軍論』をめぐる諸問題にもふれてみたい。

一、洛東遺芳館本の書誌
二、洛東遺芳館本の刊年
三、洛東遺芳館本と播磨掾正本
四、洛東遺芳館本本文の古態性

洛東遺芳館本について検討する場合、その書誌的考察を避けて通ることはできない。そこで十分な分析はできな

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

いかもしれないが、今は鄙見を述べさせていただき、後日、大方の御批判、御叱正を賜ることにしたい。

一、書　誌

まず、洛東遺芳館本の書誌の概要を紹介しておきたい。

・装幀　半紙本。縦二一・六糎、横一五・三糎。

・表紙　元表紙。錆納戸色。見返し部分が剝がれており、そこに右から「甚五郎」「片山村」と墨書されている。

・匡郭　重郭。縦一八・一糎、横一二・八糎。

・題簽　元題簽。重郭。縦一八・八糎、横五・五糎。

直之 正本 うつし	けんへいいくさろん 源平軍論 かまたひやうゑてうのつかひの事
	新板 正本屋 太兵衛

元題簽

・内題　源平軍論。

・段数　六段。各段の冒頭に次のように記す。

源平軍論　　初段

源平いくさろん　二たんめ
源平軍論　三段目
源平軍論　四段目
源平軍論　五段目
源平軍論　六段目

初段のみ、二行分で記す。

・丁数　十八丁。

・行数　十六行。一行あたりの字数は五〇字前後から七〇字前後。

・板心　上方に「軍」「イクサ」「イクサロン」「軍ロン」「いくさろん」「けん平」とあり、その下に「一」から「十七、□」までの丁付を記す。[注2]

・所属　未詳。

・挿絵　十六頁分（見開き七、片面一）

一ウ・二オ、三ウ・四オ、五ウ・六オ、七ウ・八オ、九オ、十ウ・十一オ、十二オ、十三ウ・十四オ、十六ウ・十七オ。

各図に次のような説明がついている。

第一・二図（一ウ・二オ）〔右〕「ごとう兵へ」「さゝきげんざう」「はたけ山庄司」「みうらの大すけ」「いさはの六郎」「かまたひやうへ」「あら二郎よしすみ」〔左〕「大将よしとも」「すきもと太郎」「くまかへの二郎」「平山むしやところ」「同二郎すへしけ」「いのまたの小平六」

第三・四図（三ウ・四オ）〔右〕「平家大将きよもり」「ちくこのかみ家さた」〔左〕「へいけのくんせ

いにくる所」「みすみの源二」「しろの兵さん〳〵にいる」
第五・六図（五ウ・六オ）〔右〕「みうらの大介」「かまたひやうへ」「ことうひやうへ」「はたけ山庄司」「大将よしとも」「平山のすへはる」〔左〕「ひら山のすへしけ」「くまかへの二郎」「くりはまかくひ」「みうらのあら二郎」「すきもと太郎」「よししけかくひ」「いのまた小平六」
第七・八図（七ウ・八オ）〔右〕「平きよもり引かへす」「平山すへしけかけよる」〔左〕「しやきやうすゑはる」「いからの藤太さいこ」「しやうの内兵」
第九図（九オ）「すき本太郎」「あら二郎」「小平六」「かまた兵へ」「平山すゑはる」「大将よしとも」「すゑしけかけ出る」「くまかへの二郎」
第十・十一図（十ウ・十一オ）〔右〕「すきもと太郎」「いゑさたすきもとニろんノ所」「よしの」「花月のまへ」「四ばんつくり物」「三ばんノつくり物」「二ばんノつくり物」〔左〕「一番ノつくり物」「たつたのまゑ」「きゝやうのまへ」「けんじさた本」「平のきよもり」
第十二図（十二オ）「すき本太郎」「てきノ物いけ取」「すへしけ」「くまかゑの二郎」「いの又ノ小平六」「あら二郎」
第十三・十四図（十三ウ・十四オ）〔右〕「すき本太郎大刀おるゝ」「みすみのけんし」「あら二郎くひとる」「うすいの形部」〔左〕「くまかへの二郎」「きとうくむ所」「平山むしや所すへしけ」「あらいしなけらるゝ」「こんへいろく」「いるまのすくねみつあきら」
第十五・十六図（十六ウ・十七オ）〔右〕「すきもと太郎」「いかのはんくわん」「とを〳〵みのくわん者」「かまた兵へ」「さまのかみよしとも」「のゝむら兵こ」「さ大しん」「くわんはく」〔左〕「とはのいん」「源平のそでう」「う大へんもくろくよみ給ふ」「ひらのゝ九郎はくでうす」「きよもり」「ちく

このかみ」「けんしさたもと」「きくち」「はらた」

・節譜　「三重」が、初段にのみ二箇所付されている。句切れは・点。

・印記　初丁に「清長」とある。

・刊記　終丁、本文末にある。

「右一字一言不略以正本開之者也」、下に重郭で「明暦四仲秋吉旦屋太兵衛」とある。

二、洛東遺芳館本の刊年

洛東遺芳館本の刊記によれば、同書は明暦四年八月の刊行であり、板元は大坂の書肆西沢太兵衛である。板元については題簽からも西沢板であることが明らかである。だが、その刊年については、これをそのまま洛東遺芳館本そのものの刊年と見なしてよいかどうか、いささか検討を要するようである。というのも、現存する万治から寛文中頃にかけて刊行された正本と比較すると、洛東遺芳館本がそれらとは異なった形式を備えているように思えるからである。『古浄瑠璃正本集』第三に、ちょうどその時期に上梓された上方板の正本が数多く掲出してあるのを整理して、洛東遺芳館本と対照して示しておく。(表1)

表　1

正本名	刊年月	板の大きさ	匡郭	段数	挿絵(丁)／全丁	行数	一行の字数	丁付	板元
源平軍論	明暦四・仲秋	二一・六×一五・三	一八・一×一二・八	六	八／十八丁	十六	五〇～七〇	通	西沢太兵衛
にたんの四郎	万治二・　正	二二弱×一五・三	一八・五×一二・八	六	六／二十半	十六	三一～四七	上・下	西沢太兵衛
にたんの四郎	寛文七・　五	二一・八×一六	二〇×一五	六	六／十八半	十七	三四～四五	上・下	山本九兵衛

源平恋遺恨	万治一・七	二一・八×一六	二〇・三×一五	六	七／二十一	十六	三一～四五	上・下	山本九兵衛
よろひがえ	万治三・五	二一・五×一六	二〇・三×一五	六	五／十七半	十六	三四～三八	上・下	山本九兵衛
くわてき船軍	万治三・七	二二×一六・五	二〇・五×一五	六	五／十七半	十六	三三～三七	上・下	正本屋（削除）
酒典童子若壮	万治三・八	二二・三×一六	二〇・三×一五	六	六／十八半	十六	三四～四〇	上・下	山本九兵衛
松浦合戦	万治三・十	一九・三×一三	一七・二×一二	六	三半／十一半	十四	二七～三二	通	山本九兵衛
判官吉野合戦	万治四・三	一九・五×一三・七	一七・五×一二・三	六	五／十三半	十五	二七～三一	通	（山本九兵衛）
一切記	寛文元・七	二一・八×一五・七	二〇・三×一四・五	五	五半／十九半	十六	三〇～四三	上・下	太夫正本
たいしよくわんまわう合戦	寛文一・卯	二二×一六	二〇・三×一五・二	六	五半／二十半	十六	三一～四五	上・下	山本九兵衛
あさいなしまわたり	（寛文一・六）	二二×一六・三	二〇・二×一四・八	五	七半／十九	十六	二三～三七	上・下	（太夫正本）
いし山もんだう	寛文一・七	二二×一五・五	一七×一二	六	四半／十九	十四	二二～三一	通	西沢太兵衛
くわばら女之助兄弟かたき打	寛文二・七	二二・四×一六・三	二〇・三×一五・五	六	六／二十一	十六	三九～五〇	上・下	山本九兵衛
常陸坊かいぞん	寛文二・八	二二×一六・七	一〇×一五	六	六半／十八半	十六	三二～四二	上・下	山本九兵衛
大友のまとり	寛文二・極	二二×一六・六	二〇・五×一五	五	六半／二十半	十六	二八～四九	上・下	山本九兵衛
大友のまとり	寛文三・二	二一・七×一六・四	二〇・二×一四・五	五	六半／十九半	十六	二四～四〇	上・下	八文字屋
楊貴妃物語	寛文三・弥生	二二・三×一六・二	二〇・三×一五	六	十五／三十九	十二	二二～二六	通	西沢太兵衛
今川物語	寛文三・五	二二×一六	二〇・五×一五・二	六	六／二十一半	十六	二八～五一	上・下	山本九兵衛
今川物がたり	寛文三・五	二二×一六・四	二〇・五×一四・八	六	五／二十一	十七	三四～四八	上・下	未詳

なすの、いこん	寛文三・五	二一・八×一六	二〇・三×一五・二	五	六／十九	十六	二三～三九	上・下	山本九兵衛
なすの与一竹生嶋詣付舟いこんの事	寛文三・六	二一・七×一六・三	二〇×一五	一一	六／十九	十六	二四～四〇	通	八文字屋
わだざかもり	寛文四・正	二二・五×一六・二	一七・二×一二・二	六	五／十三半	十六	三一～四〇	上・下	山本九兵衛
わたざかもり	延宝四・十一	二〇・五×一五	一九・二×一四	六	六／十七	十五	二八～三五	上・下	正本や五兵衛
あまくさ物がたり	寛文六・八	二二・三×一六・四	一七・三×一二・二	六	八半／二十半	十六	二九～四〇	上・下	鶴屋喜右衛門
みはら物語	万治二・三	二一・七×一六・五	二〇×一五	六	六半／二十九	十四	三〇字前後	上・下	山本九兵衛
義経記初巻	万治四	二一・五×一六	二〇×一五	六	五半／十七半	十六	三〇～三七	上・下	八文字屋

（右の表は『古浄瑠璃正本集』第三の解題にある書誌をそのまま利用させていただいた）

まず、板の大きさと匡郭について見てみよう。前掲の表によれば、洛東遺芳館本の板の大きさと匡郭は、『にたんの四郎』（万治二年正月）とほぼ同じである。匡郭は中形本のそれよりも大きく、半紙本のそれよりも小さい、両者の中間くらいの大きさである。この『にたんの四郎』の版式との類似からいえば、洛東遺芳館本は万治頃まで遡ることのできる正本といえるであろう。

次に洛東遺芳館本の挿絵に注目しておきたい。挿絵は見開き七、片面二の十六頁分あり、万治、寛文頃の正本の挿絵としては、いささか数が多いほうであるが、その画風は万治頃の上方板の挿絵に近く、後の正本の挿絵に比して人物が小さく描かれており、古風な趣を留めている。なかでも安田富貴子氏の紹介された万治三年正月刊の『阿部鬼若丸』[注3]の挿絵ときわめて類似しており、挿絵の画風から見る限り、洛東遺芳館本は万治頃の正本と考えることができる。なお、その繊細にして精緻な描写において、万治頃の正本の挿絵としても秀抜なものの一つといえるのではないかと思われる。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com